

# 米袋をエコバッグに



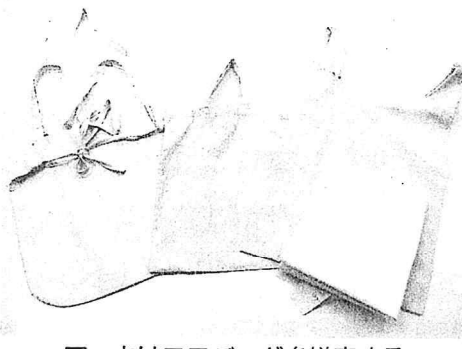
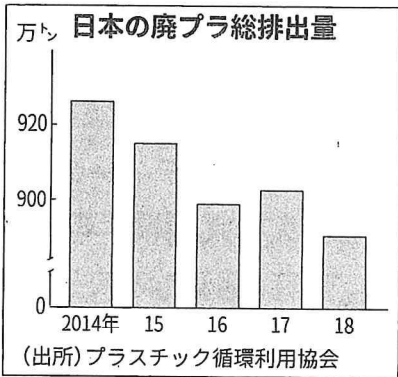
通常は廃棄される米袋を使ったm・u・k L a bのエコバッグ。「もったいない精神」と新潟の米を同時にアピールする

7月から全国の小売店でレジ袋の有料化が義務付けられるのを受け、今後の需要が見込まれるのがエコバッグだ。新潟県内では米袋を再利用したものが注目されており、メーカーは増産に乗り出す。また、小売店ではプラスチックの使用量を抑えた袋を導入するなど「プラスチック」の動きが広がる。義務化を機に環境配慮をPRする企業間の競争が熱を帯びそうだ。

六日町駅(南魚沼市)から車で5分。魚野川沿いにある民家の2階に上がる。と米ぬかの香りにすぐ気がついた。「ここが私たちの職場です」。

m・u・k L a b南魚沼米袋研究所の川島亜紀子さんが案内してくれた部屋には大量の米袋が保管されている。同研究所は米袋を素材

## レジ袋有料化、代替品広がる



アーキはエコバッグを増産する

## 子育てママが作成 アーキ 受注増え生産3倍

「m・u・k L a b」に大量の米袋が保管されている。同研究所は米袋を素材にしたエコバッグを製造・販売する。近隣の農家を保つための布を内側に張り、完成だ。「魚沼米」



や「新潟米」といった表示をそのままバッグの模様にし、味のあるデザインに仕上がっている。

2014年に発売し、県内の土産物店で扱っている。価格は1000円、2000円。出張に訪れるビジネスマンが話のネタにするため購入する人が多いという。

近年は全国的な環境意識の高まりとともに需要も伸びている。商品に関する問い合わせは例年の2倍近く増え、従来の手付けバッグとは違つ、肩にかけて使つたものを求める声も寄せられている。同研究所は販路を広げるため、19年に新潟県産品を専門に扱う通販サイト「新潟直送計画」への出品を始めた。

製造を手がけるのは南魚沼市や十日町市で幼い子を持つ主婦たち。「育児に忙しい女性たちの交流の機会をつくりたい」という思いから川島さんが代表として同研究所を運営する。作業は家庭用ミシンがあれば自宅でもできるため、主婦たちの収入源になる。

米袋は耐水性に優れ、エコバッグに加工すれば2〜3年は使える。川島さんは「本来は廃棄されるものを再利用することの意味がある。米どころならではの商品で地元への発信にも役立てたい」と意気込む。

政府は7月からレジ袋の有料化を義務付ける。レジ袋の使用量を抑え、プラスチックごみの削減につなげるのが狙いだ。消費者のマイバッグの持ち参が促され、需要増を見込む関連メーカーも設備の増強に動き出す。

県内の小売店も有料化を前に対策を打ち出す。ひらせいホームセンター(新潟市)は植物性樹脂を10%混ぜて作ったレジ袋に切り替え、1袋5円で販売する。4月までに新潟や富山、石川県など45店全店で導入する計画。完全な生分解性ではないが、レジ袋に使つたプラスチックの総量を減らせる。

袋の仕入れ価格は従来比1.5〜2倍かかるが、環境問題に積極的に関与する姿勢を示して「負担を強いられる顧客の理解を得たい」と(同社)と考えている。レジ袋で得た収入は自治体の環境事業に寄付するところ。